

V. 小瀬原石丁場の分布調査

令和4年度の小瀬原石丁場における踏査は、令和3年度で実施した踏査範囲から北に広げるように実施した。谷を上り下りしながら、幅10cm以上の矢穴がある石と刻印がある石を探索すると、小瀬原石丁場跡の西側斜面に矢穴石を1点（No. 18）、小瀬海岸B地点の東側谷筋に矢穴石2点（No. 19, 20）を確認した（第4図）。

小瀬原石丁場周辺は1960年代まで採石が行われ、重機が通った道など現代の採石痕跡が明瞭に残っている。そのため、近世～近代における採石の痕跡はわずかに残存するのみで、No. 19, 20は原位置を保っていない。しかしながら、谷筋に矢穴幅が広い矢穴石が存在する、ということはその谷筋で17世紀に採石が行われていたという傍証になるだろう。また、海岸部（小瀬海岸A・C地点）にも矢穴幅が広い矢穴石があることから、小瀬原石丁場の範囲が北側に広がることは確実だろう。

今後は、踏査を引き続き進めて小瀬原石丁場の範囲を明らかにしたい。

（梶原）

VI. 千軒檀塔菩薩の豊島型五輪塔

千軒丁場跡から約300m南の標高約20mの尾根上に平坦地が広がり、1棟の堂が建立されている。この堂は『土庄町誌』に黒崎らとう大明神と記載され、堂内の寄付板には檀塔菩薩とある。堂内奥には豊島型五輪塔が安置されており、地輪から下は床下にある。五輪塔の風化状態から推察して、かつて屋外に露出した状態で造立されていたものを後世に覆堂として建物を建立したものと考えられる。

豊島型五輪塔は地輪以下が床下のため判然としないが、おそらく地輪の下には基壇が組まれていると推測される。視認範囲での高さが152cmのため、200cm近い総高が指摘できる。銘文は地輪が床下になるため有無は確認できない。形態は定型化した豊島型五輪塔で筆者による豊島型五輪塔の分類A類に位置づけられ、造立年代は寛永年間（1624～1644年）頃が想定できる。火輪において軒と屋根の境の段が傾斜している点、空輪において立ち上がりにわずかながら曲線をもつ点からは、寛永年間でも前半期に位置づけられる可能性がある。その場合、千軒丁場跡での採石活動時期に並行することとなり、関連性が推測され興味深い。ちなみに五輪塔の造立されている尾根上は石丁場及び海上を含めた周辺域を見渡せる場である。堂の前面には広い平坦地が残されており、南に行くとそのまま海に下る。石丁場に関連した施設を推測することも可能である。

当五輪塔に関する伝承は現状で聞き取り等はできていないが、名称の「らとう」「檀塔」からは「ラントウバ」が想起され、いわゆる墓場（詣り墓）に由来するものと推測される。類似した名称は豊島石造物において各所に残されている。

最後に使用石材に注目する。採石活動と並行して当五輪塔が造立されたと仮定すると、最も容易に選択できる石材は花崗岩であるが、選択されたのは火山礫凝灰岩の豊島石であった。筆者は小豆島内の石造物の悉皆調査を実施中であるが、現段階で判明しつつあることは、大坂城